

分子科学研究所の機能強化についての提案

第8代所長 川合眞紀

強み

若手 PI 育成機能：スタートアップ支援、若手を准教授に採用して自立した研究環境を提供。
共同利用機能：機器センター、UVSOR、計算科学研究センター

弱み

存在感が薄い（国内外から見た印象）：多くの小さい研究グループが散在していて、集団としての強みが見えない

看板研究者が見えない（若手中心の研究所の宿命）

PI のダイバーシティー：女性准教授は 2 名になったが、外国人 PI は歴史的にも 1 名のみ。

分子科学研究所のミッションの三つの柱はこれまで通り、最高の科学研究を創出すること、分子科学分野の人材を育成すること、そして分子科学分野の研究を支援すること。

大学共同利用機関の最大のステークホルダーは「大学」そして「研究者」である。

目標 1) 分子科学研究所の Visibility を上げる

私が所長に着任した当時と同じ目標

特別研究部門を開設し、卓越教授（知名人の誘致）とクロスアポイントメント教員（関連分野から所の活動を広げる人材を招いた）を採用し、1 研究所に閉じることなく、開かれた人用を開始。

国際的な人事還流の要となる：学生や博士研究員を世界各国から誘致することで、研究活性化に寄与する

- 研究室主宰者に外国人を 1-2 名リクルートする：関係各国からの visibility 向上に大きく貢献することが期待できる。
- 分子研の教育研究職員が積極的にサバティカル制度を利用して、海外へ出ばる。長期滞在により絆を深めて、関係する若手などへ研究所の存在を周知。

組織再編成についての私見

- 次次期第 5 期中期計画の策定に向けて検討すべきこと
 - 准教授研究グループは、現在の規模で継続：優れた若手 PI 育成機能は残すべき
 - 教授ポストの一部について、2-3 ポストを束ねてグループを作ることを提案（大規模研究室構想）所外からのリクルートが基本、2 ポスト統合すると、教授 1 准教授 1 助教 2 の構成が可能。人事の成功確率は世界的な基準に照らして 3 割程度なので、最低でも 3 研究室を設置する覚悟は必要。（現在分子研には教授 13+クロアポ教授 2+卓越教授 1+特任教授 2）
 - 現在の卓越教授のように、自ら用意する財源で研究グループの維持管理が可能な人材の誘致（場所は豊富にあり、研究グループ数を増やすことは活性化につながる）
 - 一方、卓越教授については、専門分野の異なるシニア人材を確保することも重要（人件費を分子研から手当できるかの検討は有意義。（年間 2 千万円程度を想定）

目標 2) 研究所運営業務の効率を上げる

教育研究業務と研究所運営業務の分離

戦略室の強化：今期で進めた方向をより強化すること

所としての研究事業費の競争的資金への応募にかかる作業などを、URA 中心に進める

その他

事務効率化

旅費の地域ごと定額支給：旅費申請作業の効率化（機構とともに働くべき項目）

勤怠管理のより効率的な運用（システムのブラシアップを事務センターと協力して進める）

ペーパーレス化を真剣に貫徹する

目標3) 社会との共生

今後注意しておくべき項目。

産業界だけでなく、地域社会や初等中等教育などへの貢献も社会との連携の対象となりつつある。GIGA スクール構想では、生徒一人一台端末が実行に移され、小中学校現場では教師が対応できていないとの声も聞く。急に ICT が教育現場に入り、有効活用が（きっと）数年間の大きな課題になる。